

社会的分野の「やりくり」のたとえば ～資料リテラシーを高める～

福代 明

鳥取大学附属中学校 社会科

E-mail: fukushiroa@fuzoku.tottori-u.ac.jp

Akira FUKUSHIRO (Tottori University Junior High School) : Examples of “Yarikuri (devices for better management) ” in social science. — Enhancing literacy to read out data and documents

要旨 — 本年度は社会科の研究の柱として「資料リテラシー」に取り組んだ。資料リテラシーとは適切な資料に基づいて課題を探究し、資料を活用して論理的に表現する力であると考えている。とくに重視していることは資料リテラシーを高めるため、「資料の論理的読解力を高める」ことと「資料ベースの論理的表現力を高める」ことである。このような取り組みを系統的、段階的、累積的に高めていくことにより、社会科の本質に根ざした論理的思考力が育成されるものと考え、中学校1年生、歴史的分野において取り組みや授業改善を行った。

キーワード — 資料リテラシー, 読解力, 論理的表現力, 歴史, 中学校社会科

Abstract — We have dealt with “document literacy” as the research subject of social science in the school year 2018. We consider that “document literacy” as abilities to read important subjects on the basis of pertinent data and to logically express results obtained from those data and documents. Especially emphasized to raise document literacy were enhancement of both “logical reading of the data” and “logical presentations based on the data”. Under the policy that ability of the logical thinking based on the essence of the social science is nurtured by accumulation of such activities, we have practiced lessons of history for the first-year students in the Tottori University Junior High School.

Key words — document literacy, reading comprehension, ability for logical presentation, history, social science for junior high schools

1 はじめに

社会科は、「公民として生きる力」の基礎をつくる場である。情報が氾濫する今日、適切な情報を選び、分析し、評価しながら効果的に活用する能力を身に付けることは重要な課題になっている。情報自体は容易に収集できるようになったが、本当にその情報が適切なのか、価値ある情報なのかということについての判断力を高めていくことが求められる。また情報を加工、編集して自分の考えを発信していくことも、これから強く求められている能力のひとつである。本年度に1学年の社会科の研究の柱として掲げたキーワードが「資料リテラシー」である。資料リテラシーとは適切な資料に基づいて課題を探究し、資料を活用して論理的に表現する力であると考えている。とくに重視していることは資料リテラシーを高めるた

め、「資料の論理的読解力を高める」ことと「資料ベースの論理的表現力を高める」ことである。前者は「問いを構成する指導の充実を図る」こと、後者は「書く指導の充実を図ること」である。このようなメソッドを系統的、段階的、累積的に高めていくことにより、社会科の本質に根ざした論理的思考力が育成されるものとする。

2 資料リテラシーを高めるための取り組み

① 能動的・積極的な受信者を育てる

資料リテラシーは、適切な資料に基づいて課題を探究し、資料を活用して論理的に表現することである。資料から知見や知識を引き出し、資料を根拠にして効果的に説明することが重要なポイントとなる。ただし資料は、社会的事象の側面、一部を示しているに過ぎない。したがって資

料から即座に全体や正答を導き出すことはできない。写真や映像資料の場合、イメージが先行し、それが事実の全体であるかのような錯覚を与えてしまいかねない。メッセージを論理的、批判的に読み取るためには、メッセージの送り手の意図を積極的に読み解くことも必要になってくる。資料を単に利用するだけでなく、主体的、批判的に吟味することや資料の中に潜む価値観やイデオロギーを見抜いていくことも重要である。社会科は社会認識を通して市民的資質の基礎を養うという教科の特性がある。社会事象に対し、地理的、歴史的、あるいは政治的、経済的な視点や枠組みからの問いかけとともに、「自分ならどうするのか」「何を選択するのか」「どう生きるのか」といった当事者としての自発的な問いかけも必要になってくる。このように一つの資料（情報）から複数の視点から多様な問いかけをすること、さらに問いを深めていくことが読解や探究の糸口や筋道になる。資料リテラシーや論理的思考が高まり、市民的資質の基礎が養われるものと考えられる。

② 資料からの問い方を教える

生徒に資料を示して「できるだけ多くの疑問点を出しなさい」と指示してもとまどわせるばかりである。教師に言われたまま「疑問点」を出したとしても、そのような指導だけでは問う力、考える力はなかなか高まらないし身に付かない。たとえば、ニュース報道では「5W1H」が事実を明らかにするための基礎的、本質的な問い方である。「事件はいつ、どこで起こったのか」「誰が関係しているのか」等々、「5W1H」を調べ、明らかにし、事実を浮き彫りにしていくのが大切である。「見えるモノ・コト」から「見えない関係」を洞察し、課題を発見・構成し、探究していくためには、このような「問い方」をもとにして観察したり、考えたこと整理したりする場が不可欠である。重要なことは多面的、多角的に資料を見て、分析的、総合的に問い続けることである。このような能力や態度を養うことにより、一つの資料からでも、複眼的に多様な情報を取り出すことができるようになる。

3 成果と課題

① 成果としては以下の通りである。

「用語的な知識を網羅的に暗記する学習」から「獲得した概念を活用し、読解した資料に基づ

いて説明する学習」に展開できたと考える。生徒は史実、写真資料等、生徒は多様な問題意識を持っており、発展・深化を図れるような学習活動になっていったと考える。生徒の問題意識や探究の深まりは、発表の内容に表れている。発表の構成の中に学習のプロセス（課題設定・課題追究・資料リテラシー等）が組み込まれている。

② 課題としては以下の通りである。

作文力、文章力の個人差が極めて大きい。社会科においても、生徒に論理的な文章を書かせるための具体的な手順を示し、繰り返し指導を行う必要がある。特に、主張の本質を要約し、焦点化して、文章を構成するための練習・習熟が不可欠である。既習内容や自分の経験を生かし、自分の学習経験と結びつけながら主張を論じる力が弱い。一般論に終始し、意味も十分にわからないまま用語を使う生徒もいる。一つ一つの資料読解の深まりが足りなかった点が課題である。また、異なる資料の比較検討についても不十分であった。

4 おわりに

既得知識、既習内容と豊かに交わりながら、確かな論理で提案・主張を構想することは、生徒の探究意欲を高めるチャンスとなる。このことが市民的資質の基礎となる。ただ今回の学習は資料を読解したりするプロセスにおいて、論理的思考力、活用する力、課題意識を深める力、確かな資料リテラシーを高めていこうとするものである。現在、社会全体には「わかりやすさ」を求める風潮が広まり、強まっているのではないだろうか。「わかりやすさ」はそれ自体、望ましいことには違いないが、「わかりやすさ」の背後にある「意図」や「そぎ落とされた部分」を見抜く目を持つことが大切である。現実の世界は複雑で多様である。未整理でわかりにくい情報であっても、悪戦苦闘しながらも、ねばり強く問い、考え続ける態度がますます重視されなければならない。小さな情報であっても、そこに重大な問題や危機が隠れていることもある。論理的思考力は問題・危機発見や解決するための「戦略・戦術」なのである。このことが情報教育の深化につながり、生徒の情報活用能力を育成することに、豊かに結びついていくものと考えられる。